
艦魂年代史外伝 ～星になってあなたを見守って～

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂年代史外伝　く星になってあなたを見守ってく

【Nコード】

N4946F

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

太平洋戦争が始まる少し前、まだ日本が平和だったある日の事。雪降る呉の街から少し外れた小高い丘の上にある長谷川家。久しぶりの兄の帰りを待つ少女　翔香は夕食の仕度をしていた。海軍兵学校に通う兄　翔輝は翔香にとって何よりの自慢であり、大好きなお兄ちゃんであった。そしてその翔輝もまた、妹である翔香を大切にしている。これはそんなごく普通の兄妹と、その周りを囲む幼なじみや姉などの、楽しい日々の記憶と、悲しい別れのお話。長谷川翔輝の悲しい物語は、ここから始まった・・・

（前書き）

皆さんお久しぶりです。黒鉄大和です。

本編が終了して一週間以上経ちました。あの感動的な終了からもうそんなに経ったのだと思うと、少し寂しいですね。

そしてすっかり前線から離れていた黒鉄軍が再び動き出します。

今回は外伝第一作です。この物語は翔輝の戦前のお話で、瑠璃はもちろん珊瑚に瑪瑙、そして本編では名前だけで一度も出る事のなかった翔香が登場します。

翔輝の物語は、ここから始まったのです。
ではどうぞ！

白い雪がふわふわと舞い落ちる寒空の下、広島県呉市はその雪によつて白一色に染まっていた。明治の頃から海軍の街として発展して来たこの街には呉軍港があり、海軍工廠や海軍の設備、学校までもがある。

街に面した広島湾には、日本海軍の象徴とも言つべき日本艦艇が浮かんでいた。中には国民の心とも言つべき日本戦艦の姿もあつたが、そのどれもが街や山と同じく白く染まっている。その光景は何とも幻想的なものだ。

そんな呉の街から少し外れた場所にある小高い丘の上に建つ一軒の家。屋根の上に雪を載せるその家からは明かりが漏れ、煙突からは湯気が立ち上り、その家に人がいる事を表していた。

湯気が立ち上る煙突は台所に繋がっている。その台所にいるのはエプロンをした一人の少女。長い黒髪にクリツとした瞳。額より少し上や両耳より少し下に結ばれた白い紐がまたかわいらしい。年齢は十三、四歳くらい。まだまだ幼さを残しているが同年代に比べたらずいぶんとしっかりした印象を受ける。

少女は鼻歌を歌いながらまな板の上で食材を切っている。いつもと同じ夕食作りなのに、今日はとっても嬉しい。なぜなら・・・

「お兄ちゃん、早く帰って来ないかなあ」

少女は嬉しそうに微笑むと胸に掛けているペンダントを見た。

今日は海軍兵学校に通つて寮生活でなかなか帰れない兄が休暇で帰って来るのだ。そのペンダントもその兄が去年自分の誕生日に買ってくれたもの。決して高いものではないが、それでも少女にとってはきれいな宝石以上の宝物だ。

子供の頃からずっと自分を守ってくれた兄の事を、少女は心から尊敬していたし大切に想っている。その兄が海軍軍人になると言い出した時は滅多にケンカする事ないのに絶交状態まで陥った。でも

今ではそんな兄を支えようと努力している。

父や母を早くに亡くして兄妹二人三脚で生きてきた二人。お互いを助け合うのは当然の事。兄ががんばって学業をこなしているなら、妹の自分はそんな兄をしつかり支えてあげようと思っていた。

しつかりした妹である。

今日は兄が帰って来る。そう思うと自然と唇の端が緩んでしまう。

「えへへ、あ、煮過ぎちゃうよおッ！」

つつい嬉しいのあまり意識が飛んでいた少女はグツグツと煮えだした鍋を見て慌てて鍋を別の場所に置く。まだこの頃は竈かまどの時代。コンロなんて気の利いたものはなく、調理の時は付きっ切りになっ
てしまう。

少女は鍋を避難させて切っていた具材を鍋に投入。味見をするも少々味が薄いのでさらに調味料を加える。

両親がいない生活は、いつの間にか少女を同年代の子とは明らかに違う領域にまで料理の才能を高めていた。もはや高級料理店の料理長顔負け域にまで達しようとしている少女の料理の腕。その原動力は兄を想う気持ちだ。

少女はふと窓の外を見る。雪が降る景色は幻想的でついうつと
してしまいが、それは同時に大好きな兄がこの寒空の下で凍えてい
ないだろうかという不安に繋がる。

少女が向かえに行くべきか真剣に悩み始めた頃、

「ただいまあ！」

今誰よりも聞いたかったその声を聞き、少女の顔がまるで一足早
い春桜のようにぱあっと華やいだ。

少女はじつとしていられずに走り出す。向かう先は玄関だ。

暖簾のれんを潜り廊下に顔を出すと、そこには大好きな兄がいた。ちょ
うど今彼は靴を脱ごうとしているらしくこちらに背を向けている。
チャンスだ。

少女はそおっと兄の背後に迫ると、思いつ切り彼の背中に抱き付
いた。

「おわぁッ!？」

「おかえりお兄ちゃんッ!」

いきなり後ろから抱き締められた少年は一瞬バランスを崩すが、伊達に海軍軍人をやってる訳ではない。日々の厳しい訓練で培った身体能力がうまくそれを乗り切らせた。

「ったく、いきなり後ろから抱きつくなよなあ」

少年は少し呆れながら言うが、その表情はやはりどこか嬉しそうだ。

一方の少女は兄に怒られても気にしない。実に一ヶ月ぶりの兄の背中。今堪能しないでいつ堪能するか。少女はさらに体を擦り寄らせる。

「えへへ、お兄ちゃん元気だったあ？」

「元気だよ。ほら離れなさい」

「嫌だよお」

「濡れるぞ」

その言葉に少女はパツと離れた。濡れるのが嫌なのではない。見詰める先にいる兄は軍帽や肩などに雪を被っている。軍服もすっかり濡れていた。

「ビショビショじゃない!」

「そりゃあ雪の中を歩いてきたからね」

少年は当然だろうと言いたげな顔で答えるが、少女はまるでこの世の終わりのような絶望的な顔をする。その顔色は真っ青だ。

「お、お兄ちゃん風邪引いちやうよおッ!」

「いや、大丈夫でしょ。っていつかむしろお前の方がヤバイんじゃないか? 顔真っ青だぞ?」

「い、今すぐに着替え持ってくるッ! お兄ちゃんも早く家に上がつて服を脱いでッ! 死んじゃうよおッ!」

「いや、風邪くらいじゃ死なないし」

少年のツツコミを無視し、少女は全速力で兄の部屋に向かう。その部屋にあるタンスにはキツチリと折り畳まれた彼の和服が置いて

ある。少女はそれを掴むと急いで玄関に向かう。だが、そこにはすでに彼の姿はない。

「お、お兄ちゃんッ!? どこ行つたのおッ!?」

少女は泣きそうになりながら玄関を開けて極寒の世界へ

「僕はここだよアホッ!」

その声に少女が振り返ると、脱衣所から彼が顔を出した。その無事な姿を見て、少女はへなへなと力が抜けてその場に崩れ落ちた。

「も、もうッ! 心配したじゃない!」

むうッと頬を膨らませて怒る少女に、少年は呆れたようにため息する。

「お前、もう少し考えてから行動しろよな」

「だ、だつてえ・・・」

「ったく。それより着替え持って来てくれ」

「あ、うん!」

少女は慌てて手に持っていた服を兄に手渡す。少年はすぐにそれを着ると脱衣所から出る。すると、少女はちよこんと隅に立っていた。どうやら待っていてくれたらしい。

「何も待つてゐる事はなかったろ?」

「だ、だつてえ・・・」

もじもじとする少女を見て、少年は小さくため息をして微笑む。

「ったく、いくらしっかり者になってもドジるし早とちりするし子供っぽいし。どうしようもないな」

「ひ、ひどいよお・・・ッ!」

「でも」

少年はそつと、少女の頭を撫でた。いつもさされている、少女の大好きな兄からのスキンシップ。もちろん抵抗などする事はなくそれを受け入れる。

少年はそんな妹をそつと抱き締めた。大好きな兄の腕の中、少女は嬉しそつに微笑む。

「翔香が妹で本当に良かったと思うよ」

「お兄ちゃん・・・」

少女　翔香は嬉しそうに微笑むと大好き兄に思いつ切り抱き付く。

「ほら離れろって。それよりもお腹空いたよ」

少年の何気ない言葉に、少女はハツとなつて慌てて兄から離れる。もう少し抱きついていたらかったなどという思いは今の彼女からは吹っ飛んでいた。

「ま、待っててねッ！　す、すぐにご飯の用意するからぁッ！」

翔香はそう言うつと慌てて台所に戻る。途中何もない場所で転倒したが、気にせずに台所で料理を再開する。そんな妹を見て少年は苦笑いする。

「やっぱり、翔香は変わらないな」

そう言うつと、彼女の邪魔をしないようにそつと茶の間に向かった。脱衣所には彼が脱いだ軍服が壁に掛けられていた。襟えりの階級章には銀色の桜章はまだ一つも付いていない。まだまだ訓練生。そういう意味だ。

少年　はせがわ　しょうき長谷川翔輝航海兵曹長は料理をする翔香の背中を見守り

ながら、久しぶりの我が屋を見詰める。どこもかしこも掃除が行き届いていて彼女の力量の高さを窺わせる。

「技術だけは一人前になったよなあ」

「それってほめてるの？」

少し不機嫌そうにやって来た翔香の手にはお鍋が握られていた。

「そんな事言う人にはご飯はあげません」

「ごめんごめん。謝るからそれは勘弁してえ」

空腹状態でご飯お預けは拷問である。翔輝は胸の前で手を合わせて頼む。無論翔香もご飯抜きだなんてうそだ。翔輝にそんなひどい事をできるほど、彼女は非情にはなれない。

「もう、仕方ないなあ」

口ではそう言うつも、兄のかわいらしい行為にちよっぴり嬉しくなる翔香は小さく笑みを浮かべると手に持っていた鍋をちゃぶ台の上

に置く。

「今日は寒いからお鍋にしたんだよお」

「へえ、お、今日は水軍鍋（広島県の郷土料理）か。うまそうだな」

「おいしいに決まってるでしょ？ この私が作っただから」

そう言っただけまだ発育途中の胸を反らす翔香に翔輝は「はいはい。

そりゃ楽しみだ」と笑いながら返す。

「むう、今適当にあしらったでしょ？」

「そんな事ないって。心からそう思ったから」

（相変わらず変な所で鋭いよな・・・）

じーっと見詰めて来る翔香に翔輝はそーっと視線を逸らす。なんか瞳を合わせたら全てがバレる気がしたからだ。それでも翔香の視線はじーっと翔輝に向き続ける。

（これどんな拷問だよ・・・）

翔輝が無視するのも限界近くになった頃、ようやく翔香は「お皿持って来るね」と言っただけで台所に消えた。それを見て翔輝は安堵のため息をする。ちなみに翔輝の限界を感じて翔香が出て行った事など彼は知らない。人一倍翔輝を見て来たからこそできる翔香の能力だ。

「ほんとにもお」

そう言いながら小さな笑みを浮かべると、翔香はお皿を持って茶の間に戻る。そこではグツグツと煮える水軍鍋をじーっと見詰めている翔輝がいた。そのかわいらしい姿に翔香はくすりと微笑むとそつと彼の対面の席に座るとお茶碗にご飯を盛って翔輝に手渡し、自分の分も盛る。その間も鍋から視線を離さない兄に翔香はくすくすと笑う。

「お腹空いたの？」

「そりゃもうペコペコだよお」

苦笑いしながら答える翔輝に翔香は嬉しそうに柔和な笑みを浮かべる。

「えへへ、そっかそっか。じゃあもう食べちゃいましょう」

「うん」

翔香は胸の前で手を合わせると行儀正しく「いただきます」と言う。それを見て翔輝も小さく笑みを浮かべて「いただきます」と手を揃える。

「はい、召し上げれ」

嬉しそうに言う翔香に笑みを向けると、翔輝は早速水軍鍋に箸^{はし}を向ける。水軍鍋とは瀬戸内海で獲れた魚をふんだんに使った料理の事。翔輝は魚の切り身を取り出すと一度息で冷ましてから口に入れる。

「うん。おいしい」

「良かったあ・・・」

「新鮮だしね。こんな魚どうしたの？」

「瑠璃ちゃんが昨日送ってくれたんだ」

「あいつか・・・」

瑠璃とは翔香の親友にして翔輝の幼なじみの女の子の事。霞家という呉に本拠地を置く日本でも有数の貴族家にして超お金持ちのお嬢様だ。呉は海軍、そして霞家と密接な関係で成長して来た街で、その家のお嬢様である瑠璃はいわばお姫様のような存在になっている。

そんな霞家と長谷川家は繋がりは薄いが親族関係にあり、翔輝と翔香、そして瑠璃は一緒に育ってきた。他に同い年と年上のいとこがいるのだが、それは今現在は京都にいる。

瑠璃は翔輝の事が大好きで一時期は許婚直前まで話が進んだのだが、それは結局失敗に終わった。でも彼女自身は翔輝の未来のお嫁さんを目指しているらしく、今でも翔輝一筋の子である。

ちなみに仲のいい翔香と瑠璃だが、翔輝が掛かるとすさまじい大ゲンカにまで発展する事もしばしば。翔輝一筋の瑠璃とお兄ちゃん大好きっ子の翔香。二人の最終到達地点は決して合いまみえる事はない。

「またあいつか」

「もう、瑠璃ちゃんをあいつ呼ばわりしないでよお」

「だってさ、この前もとんでもない量の食材を送りつけてきたろ？」

「う、うん。まあそうだけど・・・」

「あれ全部処分するのに一体どれだけ色々な人におすそ分けした事か」

思い出すだけで疲れたのか、翔輝はあとため息をつく。昔からやる事なす事常人外れの瑠璃に振り回される翔輝の苦悩だ。

そんな兄を見て、翔香は苦笑いする。その理由は、

（じ、実はこの鍋に入ってる魚介類の十倍以上の量がまだ残ってるなんて、言えないよね・・・）

瑠璃の破天荒なやり方に振り回されるのは翔輝だけでなく翔香も同様だ。以前も山登りしたいと言ったら紅葉の美しい山一帯を買い取ったり、海が見たいと言ったら日本郵船から客船一隻を買い取ったり。いつもいつもお嬢様パワー全開。それが霞瑠璃という人間だ。しかし、食材を送ってもらってるからこそこうしておいしい料理が食べられるのだ。文句の言える立場じゃない。しかも向こうは好意でやっている事。悪意なんて微塵もないのだ。だからこそ厄介なのだが。

「お兄ちゃん、まだ訓練生だから給料はもらえないしね。仕方ないよ」

翔香はそう何気なく言っただつたが、その言葉は見事に翔輝の感受性の強い心を貫いた。一撃必殺。

「ご、ごめんな。僕がまだ半人前だから給料はもらえないし、むしろ学費を払う側だから・・・」

親の遺産や霞家からの援助金で海軍兵学校に通っている身である翔輝。資金面は霞家に頼り、家の事は翔香に任せっきりだ。正直、ものすごく兄としての威厳もクソもない。情けない事この上なし。自分の何気ない言葉で激しく落ち込む兄に、翔香はあわあわと大慌て。

「ご、ごめんなさい！　べ、別に私そんなつもりで言ったんじゃない

「いんだよ！」

「いや、事実だし。間違つてないから」

「ご、ごめんなさああああいッ！」

その後翔香は必死に翔輝を励まし、何とか食事を再開させた。相変わらず撃たれ弱い兄を見てちよつと安心し、もう少し強くなつてほしいと願う、複雑な妹心。翔香は魚の切り身を口に入れながら今後の事について考える。

「翔香？ どうしたの？」

「え？ あ、いや、何でもないよ」

えへへと笑つてごまかす翔香に、翔輝は不思議そうに首を傾げるが、それ以上の追求はしなかった。

その後食事は会話を交えて進み、あつという間に鍋の中身はなくなった。無論瑠璃の送つて来た食材のうまさもあるが、何よりも箸が進んだのは翔香のプロ並みの料理の腕だ。

食べ終わった食器を片付けようとして「私がやるからお兄ちゃんはゆっくりしてて」と言つて食器を一人で片付ける翔香。そんな彼女の後姿を見て翔輝は小さく笑みを浮かべる。

「翔香はきつといいお嫁さんになるよ」

「ふえッ！？ な、何よいきなり・・・ッ！」

顔を真っ赤にする翔香に、翔輝は笑顔を絶やさないうい。

「いや、本当にいいお嫁さんになるなあって思つてさ」

「そ、そうかな？」

「うん。あ、でもやつぱりまだ結婚は認めないぞ」

「・・・まだ民法上無理だから」

「そついえばそうだな。ああ良かった良かった」

屈託のない笑みを浮かべる兄に、ちよつぱり寂しげな笑みを浮かべる翔香。

（・・・私、結婚するならお兄ちゃんとがいいなあ）

小さい頃からずっと自分を守つてくれた翔輝の事を、翔香は大好きだった。大好きで大好きで、昔は「お兄ちゃんのお嫁さんになる

！」と周りに豪語していた。だが、成長して母に兄妹は結婚できないと知った時、三日三晩泣き続けた事もあった。

子供心どころではなく本気でそう思っていたからこそ、本当に悲しかった。

正直、どうして自分達は兄妹なのだろうと親を恨んだ事もあったし。せめて血の繋がってない義理の兄妹が良かったと本気で思っていた。

結婚できないし、翔輝は自分をそんな風には見ておらず妹として接している。だからこそ今まで間違いはなかったが、一時期本気で既成事実を作れば勝ちと思った恥ずかしい記憶もある。

今では兄を支える立派な妹としてがんばっているが、正直他の男と結婚する気はさらさらないし、翔輝が他の女と結婚するならば全力で阻止するつもりでいた。

結婚ができないなら、ずっと二人つきりで生きていたかった。

この禁断の想いは、ずっと自分の胸の中に留めておくつもりだった。

翔香は急に兄の顔を見るのが照れくさくなって逃げるようにして台所に向かうと食器洗いを始める。翔輝はそんな妹に「がんばれよ」と激励を送ると浮かせていた腰を再び座布団の上に落とした。

この時代にはテレビもパソコンもない。こういう時は急に暇になつてしまうものだ。満腹になった翔輝がそんな風に暇を持て余していると、ふと視界の隅に新聞が映った。何もする事もなく、翔輝は何気なくその新聞を見る。そこには日本軍の支那事変の中国戦線拡大や米英の中国からの日本軍即時撤退に対する反対意見、満州国を認めない米英への非難文、先の日独伊防共協定をより堅固な軍事同盟に結ぶべきだという意見などで埋め尽くされていた。

「陸軍は苦勞しているらしいな」

翔輝は中国戦線の日本軍と八路军（中国人民解放軍の前身）との戦闘の経緯が書かれた記事を読みながらつぶやいた。そしてふと社説を見る。

「なにに……」国民世論を重視して対米英戦を主張する陸軍に
対し、海軍は対米英戦に極めて消極的。特に米内光政海軍大臣、山
本五十六海軍次官、井上成美軍務局長の《海軍左翼三羽》は徹底
して対米英戦に反対。国民世論を無視した非国民……か」
翔輝は不機嫌そうに新聞をたたむ。世の中そんなに単純でないと
新聞社や国民はまるでわかっていない。正直嫌気が差す。

「何言ってるんだ。陸軍が対米英戦を主張したところで海の向こうの
アメリカにどうやってた戦うんだよ。太平洋を歩いて渡るつもりか
？ バカバカしい。米内大臣や山本次官、井上局長は正しい事を言
ってるんだ。国力が何十倍も違うアメリカに戦争を挑むなんて、ど
うかしてるよ。あんな大国を相手にしたら、こんな小さな島国なっ
て木っ端微塵に潰されるに決まってるじゃないか。これだから無知
は困るよ」

翔輝は不機嫌そうにそう吐き捨てる。彼も山本達と同じ対米英戦
反対の人間だ。それどころか三国同盟はもちろん三国防共協定も反
対。米英などとは協調政策を執るべきだと考える徹底した戦争反対
主義者だ。

彼の親しい教官が駐米士官をしていた。その為彼からアメリカの
巨大さと日本とアメリカの国力の差をすっかり叩き込まれていた。
軍人が戦争反対などと口にするのはご法度だが、彼は無益な争い
を嫌っていた。そんな彼を、翔輝も尊敬していた。

翔輝の何気ない独り言に、食器を片付け終えて戻って来た翔香が
不安そうな顔で翔輝の横に腰を掛けた。

「お兄ちゃん。そういう事人前では絶対に言わないでよね。非国民
って言われちゃうよ」

当時の日本は言論弾圧の時代な上に戦争賛成の世論が高まってい
た頃。そんな中で政府や軍部に反対する事や戦争反対など言えば
非国民と言われ村八分状態や、最悪特別高等警察に捕まる可能性も
出て来る。それほどまでに、当時の日本は恐ろしい国だった。

これが翔輝一人の問題だったら、彼は恐れずに戦争反対と唱えて

いただろう。しかし彼は一人ではない。もし自分がそんな問題を起せば妹の翔香にまで危険に晒す事になる。そんな事は絶対にダメだし、する気もない。

「わかってる。これは僕の意見だ。僕のせいでお前を危険に晒す訳にはいかないもんな」

違う。翔香が言っているのはそうじゃない。彼女は純粋に、

「お兄ちゃんは何もわかってないッ！ 私はお兄ちゃんを心配しているのッ！」

顔を真っ赤にして怒る翔香に翔輝は呆然とするもすぐに「ごめん

．．」と小さく謝る。

「あ、ごめんなさい．．．」

つい怒鳴ってしまった翔香も小さく謝ると黙ってしまう。

気まずい沈黙の中、翔輝と翔香はお互いに視線を合わせられずに沈黙を続ける。そんな中、翔輝はそつと視線をさ迷わせている翔香を見てくすりと笑った。

「心配してくれてありがとう。翔香」

翔輝はちゃんとわかっている。彼女は純粋に兄である自分を心配しているのだ。だからこそあんなにむきになった。ちゃんと、わかっている。

「お兄ちゃん．．．」

翔輝は頬の赤い翔香の頭をそつと撫でた。子ども扱いされるのは嫌いだったが、大好きな兄に頭を撫でられるのは好きだった。だからこそ、翔輝の温かな手を、翔香はそつと受け入れる。

そんな仲睦まじい二人を、仏壇に飾ってある父と母の遺影がそつと見詰める。翔輝の父は満州事変で、母は二年前に病死した。今は、たった二人だけの家族だ。

ささやかな幸せ。それがずっと続けばいい。そう、二人は心から思っていた。

外は雪が降り積もり寒かったが、二人の心はとても温かった．．

時は一九四〇年の冬。後に日本海軍の艦魂達の心の支えとなる長谷川翔輝と、その妹である翔香の、最後の冬の事であった・・・

翌年一九四一年の春、いよいよ対米英戦賛成の世論が本格的に高まって来た頃のある日、その日翔輝は久しぶりの休日在家で満喫していた。片手にはお茶、もう一方の手には戦争賛成意見をこれでもかと埋め尽くされた新聞が握られていた。

「えっと、仏印（フランス領インドシナの略）とタイが講和を結んだか。良かった良かった」

仏印とタイは去年の終わりに武力衝突していた。それが講和されたという記事が　戦争賛成記事だらけの面の隅に書かれていた。ここ最近の記事の中では一番嬉しいものである。

「これで戦争が縮小してくれるといいんだけど、無理だね」

戦争は日増しに拡大している。米英との戦争ももはや時間の問題となっていた。ちょうど今年で海軍兵学校を卒業し、年末には軍艦勤務となる。できる事なら大好きな戦艦に乗りたいが、どうなるかは人事の人に任せるしかない。

「できればお兄ちゃんが正式に配属されるまでには戦争が終わってほしいなあ」

翔輝の後ろで彼の背中を揉んでいた翔香がつぶやくと、翔輝は苦笑いする。

「それじゃ軍人としては本末転倒だけだね」

「私はお兄ちゃんが無事ならいいの」

「ははは、まあ僕もできれば戦争はしたくないからね。純粋に軍艦が好きだって理由で海軍に入ったからさ」

「お兄ちゃんらしいよ」

「それってほめてるのか？」

「さあ？　どっちでしょうか？」

顔を合わせるとどちらからとなく笑みが零れた。

そんないつもと変わらない平々凡々な一日。今日もそんな時間が過ぎていくのだと誰もが思ったその時、

「翔輝様ああああああッ！」

突然の声と共に外に面した障子が吹き飛び、一人の少女が転がり込んで来た。突然の非現実的な出来事だったが、翔輝と翔香は驚かない。もうこういう事にはすっかり慣れていたのだ。

「瑠璃。どうしたんだよ、そんなに慌てて」

翔輝は呆れたように突如非現実的な登場をした前髪をきれいに切りそろえた黒く艶やかな長い髪を美しく流す超高価な着物を着る少女。瑠璃を見る。翔香も同様に苦笑いしながら瑠璃を見詰めている。

瑠璃はハッと今まで伏せていた顔を上げると辺りを見回す。そして、苦笑いする翔輝と視線が合うと、ぱあっと笑顔を華やかせる。

「翔輝様ッ！ お会いしたかったですわぁッ！」

瑠璃は歓喜の声を上げて翔輝に抱き付いた。翔輝はそんな瑠璃の突然のタツクルに等しい突撃に押し倒され、翔香はムツとする。

「こ、コラ瑠璃！ 抱き付くなよ！」

「えへへ、翔輝様の温もり。久しぶりですわぁ・・・」

嬉しさのあまり頬をすりすりとしり寄せて来る瑠璃。翔輝はそんな相変わらずな幼なじみに呆れ半分懐かしさ半分といった具合に苦笑いしている。ちなみに翔香はムツと頬を膨らませながら二人の抱き合いを睨んでいた。

「翔輝様、会いたかったですわ」

「はいはい。今日はまたどうしたんだ急に？」

「私が保有する世界有数の諜報機関が今日は翔輝様がお休みだという情報を探知したので飛んで来たのですわ！」

「世界有数の諜報機関が何で僕の休暇を探知するんだよ・・・」

「それは翔輝様一点だけに全機関が全力で動いているからですわ！」

「莫大な資金を投入してやる事は子供かッ！」

超大金持ちの家のお嬢様である瑠璃の金銭感覚は常人のそれと大

きくかけ離れている。その為、億単位の資金を湯水のように使っている。彼女の言う諜報機関もまたその一部だ。ちなみにもしもその諜報機関が日本政府の為に動いていたら、後の太平洋戦争の歴史が少なからず変わったかもしれない。それくらいまでにすごい諜報機関なのだが、どうやらそれは翔輝の為にだけに動いているらしい・・・

「翔輝様の為でしたらお金なんて惜しくもありませんわッ！」

「頼むから僕なんかの為に無駄な金を使わないでよ。そういうお金があるなら慈善団体に寄付してくれ・・・」

「あら、我が霞家は毎年慈善団体などに数百万円の寄付を出していますわ」

胸を反らして言う瑠璃に、翔輝はもう返す言葉もない。どれだけの資金があるのだらう霞家は。さすが元来のすさまじい資金力を第一次世界大戦後の好景気で荒稼ぎし、世界恐慌の時代も奇策などを打ち出してのし上がった経済大家だ。ちなみに数百万というのは当時では大金である。現在の物価換算に置き換えると数十億円という金額になる。途方もない額だ。

瑠璃は呆然とする翔輝を感心したのだと勝手に解釈して彼の胸の中に飛び込む。翔輝の温もりが大好き。それが霞瑠璃という少女だ。慌てるのはもちろん翔輝だ。顔を赤くして慌てて瑠璃を引き剥がそうとする。

「ちょ、ちよつと瑠璃離れて」

「バカ翔輝いいいいいいいいッ！」

「のわあッ!？」

突如怒号と共に瑠璃が通つて来た窓から必殺の跳び蹴りが翔輝に向かつて飛来した。翔輝は間一髪避け、突然の奇襲者であるツインテール少女の攻撃は失敗に終わった。だが少女はたたらを踏む事はなくきれいに着地した。音もない着地に少女の身体能力の高さを感じる。そんな再びの非現実的な登場をした見知った少女に、翔輝はもう疲れ切った顔でため息した。

「だから、いきなり跳び蹴りと同時に現れるなよ 珊瑚」

「ふん。相変わらず勘だけいいようね」

「おかげで危機回避能力は常人のそれと大きく差をつけるくらいまで高まったよ」

翔輝は疲れたようにそう言う。そんな彼の言葉に珊瑚と呼ばれたツインテール少女は不機嫌そうに翔輝を睨む。

「バカ翔輝のくせに生意気じゃない」

「毎回毎回一撃必殺の攻撃を避けるこっちの身にもなってくれよ。皮肉の一つや二つ言いたくもなるから」

「皮肉一回につき跳び蹴り一回で許してあげる。寛大でしょ？」

「どう考えても採算合わないだろうがッ！」

相変わらず無茶苦茶な幼なじみに翔輝は頭を抱えた。珊瑚を避ける際に投げ出された瑠璃と翔香が心配そうに彼に声を書けようと、

「翔輝は私を守る。だから、安心しなさい」

その優しい声に顔を上げると、そこには柔和な笑みを浮かべた美女がいた。長く艶やかな美しい黒髪に端正な顔立ち。大和撫子という言葉はまさにこの女性の為にあるのではないかと思ってしまうほど、彼女は美しかった。

そして翔輝は、その大和撫子を知っている。それどころか家族のようなものだ。

「瑪瑙姉さんッ！ 久しぶりッ！」

「ああ、翔輝。私のかわいい翔輝。しばらく見ないうちにこんなに立派になって」

久しぶりの再会に喜ぶ翔輝に対し、瑪瑙と呼ばれた美女は今にも泣きそうな笑顔でそっと翔輝を抱き締める。一瞬翔輝も慌てたが、久しぶりの姉の香りに、そっと安堵した。

「姉さんもまた美人に拍車が掛かって」

「て、照れるではないか。まったく、本当に翔輝はかわいいな・・・」

「かわいがってくれるのは嬉しいけど とりあえず着物を脱ごうとするのはやめてくれないかなッ!？」

胸元をはだけさせる瑪瑙から翔輝は慌てて離れる。瑪瑙はそんな翔輝の反応に不満そうに唇を尖らせる。

「まったく、久しぶりの再会なのだから互いの温もりを感じ合ってもいいではないか」

「姉さんはいつも過激なんだよッ！ いい加減手加減つてものを知つてよッ！」

一般常識が完全に外れている姉に、やっぱり翔輝は頭を抱えた。本当に自分には女難の相が出ているのではないかと思うほど、まともな女の子と縁がないと本気で悩んでいた。

翔輝が頭を抱える原因となった珊瑚と瑪瑙。二人は瑠璃を本家とする霞家の分家の中でも本家と最も血の繋がりが強い忠誠心の高い分家のお嬢様だ。瑠璃のいところであると同時に、瑠璃、珊瑚、瑪瑙の七宝の名を持つ三美女（性格や行動に問題があっても）は霞家三大輝石と呼ばれる霞家の三大お嬢様なのだ。

小さい頃からの付き合いで翔輝、翔香、瑠璃、珊瑚、瑪瑙は一緒に育ってきたも同然の存在。特に珊瑚は翔輝と同年で小中学校までは同じ学校の同じクラスに所属していた生粋の幼なじみ。瑪瑙は翔輝にとっては姉のような存在で、実際翔輝自身も瑪瑙の事は《姉さん》と呼んでいる。

なんとも微笑ましい関係だが、さすが霞家三大輝石。外見だけで判断できない裏設定がちゃんとある。

珊瑚は翔輝に対しては跳び蹴りで登場し、彼に暴力を働く。口も悪くわがままだが、翔輝の事は誰よりも心配している。しかし元来の素直な性格でない為にいつも素直ではない言葉を言ってしまう、いわゆるツンデレ。

瑪瑙は大和撫子の具現化とも謳われる絶世の美女である。翔輝の前でこそ感情全開の顔だが、本来はいつも無表情。その美しい顔立ちを輝かせている。その外見や器量の良さから今まで数百（噂では数千）もの縁談が組まれたが全て放棄している。なぜかというところ、それは翔輝がいるからだ。小さい頃から自分に甘えてくるかわい

弟を、瑪瑙はすっかり溺愛してしまっている。将来の夢は翔輝のお嫁さんと周りに豪語していて、翔輝の為ならどんな危険な事もする。元来の優しい性格の為にいじめられていた翔輝を助ける為にいじめっ子を半殺しにしたり、翔輝を守る為に剣道を習い、今では段位を取得。史上最強の戦闘型ブラコン。それが瑪瑙である。

外見に反して滅茶苦茶な美女達。それが霞家三大輝石だ。ちなみに霞家と親しい長谷川家の翔香を含めて霞四天王とも呼ばれる事もある。翔香も負けず劣らずかわいい顔立ちをしている上に、世間一般的にも良い子の部類に入る為、ある意味一番まともだ。まあ、こっちも極度のブラコンなのだが。

そんな問題大有りな一人である瑪瑙は翔輝の言葉にガンとシヨックを受ける。そりゃあもう世界の終わりかと思うほど（実際彼女にとつては世界く翔輝という公式が成り立っている）。

「翔輝は、私の事が嫌いなのか・・・」

「ち、違うッ！　そういう意味じゃないってばッ！　だからそんな世界の滅亡みたいな顔しないでよッ！　そもそもその絶望感はおかしいってッ！」

「わ、私にとつては翔輝が全て。それ以外の事は無用なのだ・・・だから・・・ッ！」

「ごめんッ！　僕が悪かったから泣かないでよッ！」

みんなの頼れるお姉さんである瑪瑙は、翔輝に嫌われる事を最も恐れている。昔大ゲンカして翔輝が瑪瑙に「大嫌いだッ！」なんて怒鳴ったせいで自殺未遂を起こした事もある。史上最強のブラコンという称号を持つ彼女にとつて、翔輝から嫌われる事は死を意味していた。

絶望感に打ちひしがれる瑪瑙を翔輝が慌てて励ます。そんな光景を、翔香、瑠璃、珊瑚の三人は呆れながら見守っていた。

「相変わらずお兄ちゃん大好きなんだね、瑪瑙お姉ちゃんは」

「そうなのよ。最近姉さんの先の人生が不安になってきたよ」

「関係ありませんわッ！　翔輝様は誰にも渡しません！　翔輝様は

私の婿になつてもらうのですわ！」

突如とした瑠璃の爆弾発言に翔香、珊瑚、瑪瑙の三人が瑠璃を睨み付ける。そのあまりの迫力は、翔輝が入る余地など微塵もなかった。

「瑠璃ちゃん。いくら親友のあなたでも私の大好きなお兄ちゃんはあげないから」

「瑠璃。あんたいい加減にしなさいよ。私の下僕を勝手に婿とかにするんじゃないわよ」

「瑠璃。今の言葉を撤回しろ。でなければ、貴様の命はないぞ」

背後から暗黒世界を広げる三人に対し、瑠璃はふふんと自信満々な笑みを浮かべる。どこからそんな意味不明の自身が湧き出してくるかは不明だが。

「あなた達がいくら何を言おうと無駄ですわ。私と翔輝様は赤い糸で結ばれてますの。この糸を切るなんて誰にもできませんわ」

チヨキン・・・

「うにゃあああああッ!? わ、私と翔輝様を結ぶ愛の赤い糸があああああッ！」

「お兄ちゃんは誰にも渡さないもんッ！」

「しょ、翔香・・・よく私と翔輝様の赤い糸を切ってくれましたわね・・・ッ! しかもそんな何の変哲もないハサミで・・・ッ!」

翔香が持つのは何の変哲もない普通のハサミだ。だが、それは翔香にとって大切な大切な思い出の宝物であった。

「これはただのハサミじゃないもん! 私が図工で使うお兄ちゃんからプレゼントされたハサミだもん! これと一緒にお兄ちゃんと切り紙をした、思い出いっぱいハサミだよ!」

「・・・くうッ! まさかそんな隠し玉を・・・ッ!」

「ふむ。では私はこの指輪を見せてやろう」

「そ、それは確かお兄ちゃんが子供の頃にお姉ちゃんにプレゼントしたおもちの指輪ッ!?!」

驚く一同の視線に満足しながら、瑪瑙はそつと薬指にはめたおも

ちやの指輪を大切そうに撫でる。その時の彼女の笑顔はとても幸せそうだった。

「他にも翔輝にもらった肩たたき券や簪^{かんざし}、手編みのマフラー、手編みの手袋、花畑で作ってくれた花輪、川原で見つけてきれいに磨き上げた石、道で拾ってきたどんぐり」

「い、一体どれだけ持っているのですのッ!？」

「ふん。翔輝からのプレゼントは大事に世界最高峰の金庫の中に保存してある」

「ああ、あの戦艦の主砲が直撃しても壊れないっていうシエルターの素材で造った金庫の事？ 何入ってるのかと思っただらそれ・・・？」

呆れる珊瑚を無視し、瑪瑙は自信満々に胸を反らす。さすが大人なだけあって他三人とは比べ物にならないくらい大きい。結局中身は子供なのだが。

「わ、私だつて翔輝様からもらったネックレスは今でも大切にしていますわ!」

「私もお兄ちゃんからもらった鶴の折り紙、今でも大切にしているんだから!」

「な、何だとッ!？ そんないい物を・・・うらやましい・・・ッ!」

「そろそろ決着をつけますわよッ! 誰が一番翔輝様とのラブラブな思い出の品を持っているのか、勝負ですわ!」

「望むところだ!」

「わ、私だつて負けないよッ!」

「ちよつと待てッ! 本気でやめてッ! 僕の心の傷がものすごい勢いで思い出つていう血を噴き出してるからあッ!」

翔輝が慌てて暴走する三人を止めに入った。このまま野放しにしておけば自分の恥ずかしい過去が容赦なく明るみになる可能性大であつたからだ。もちろん当の三人はそんな風には思っていない。むしろ翔輝との大切な思い出の数々だ。

そんな大騒ぎする四人を見詰め、珊瑚は小さくため息する。意外にもこの中ではある意味一番の常識人である珊瑚は、そんなアホらしいやり取りの中に入る気すらなかった。

「まったく、もう少し大人になりなさいよ」

呆れながらそう言う珊瑚だったが、そのきれいな着物の下にはきれいなペンダントが首に掛けられていた。それが翔輝から誕生日プレゼントにもらったものだというのは秘密だ。

その後、翔輝の思い出自慢の争いはいつの間にか翔輝を巡る戦いに本格的に変わり、翔輝の奪い合いに発展した。さすがにそこまでいくと珊瑚も黙ってはおらずに跳び蹴りと共に参戦。舞台はいつの間にか家の外になり戦いは苛烈を極めた。

「お願いだからケンカはやめてえッ！」

ケンカの原因人物である翔輝の悲鳴など、四人の恋姫達には聞こえない。互いに見えるのは戦うべき恋敵ライバルのみ。

「翔輝は渡さんッ！ 私と翔輝の愛を邪魔する者は誰であろうと許さないッ！」

二本の日本刀を構えた瑪瑙は跳躍。太陽を背にして着物を靡かせながら上空から襲い掛かる。それに対するのは樹齢数千年の神木から切り出し、術師によって硬化呪文の施された鋼鉄よりも堅い木刀を構えた瑠璃。瑪瑙の一撃をそれで避けた。鋭い金属音が響き渡り、火花が散る。

「翔輝様と私は結ばれる運命ですのッ！ 誰にも邪魔させませんわッ！ 例え瑪瑙姉様であつてもッ！」

聖刀とも言うべき神木刀を振り、瑠璃は瑪瑙を攻撃する。だが、瑪瑙はバックステップでそれを回避。純粹な戦闘能力だけでは瑪瑙は圧倒的だった。だが、そこへ珊瑚必殺の跳び蹴りが炸裂。靴の先端に鉄を仕込んだその一撃は瑪瑙の刀を一本吹き飛ばす。

「珊瑚ッ！ 貴様あ・・・ッ！」

「いくら姉さんでも横暴は許さないわよッ！」

睨み合う姉妹にチャンスと瑠璃は襲い掛かる。だが、その剣先が

瑪瑙と捉える寸前に目の前に矢が飛来。瑠璃は慌てて後退した。そして、その矢を放ったのは、

「翔香ッ！ 邪魔するのですッ!?」

「お兄ちゃん是谁にも渡さないッ！ 私とお兄ちゃんはずっと一緒に暮らすんだもんッ！」

そう叫ぶと、翔香は弓に矢を番えて連続して放った。放物線を描いて上空から矢の雨が飛来する。瑠璃と珊瑚は避け、瑪瑙は襲い掛かる矢の雨を刀で撃ち落とす。

珊瑚の跳び蹴りが翔香に飛来するが、翔香はそれを避け、二本の刀を構え直した瑪瑙が突撃。瑠璃は神木刀で迎え撃つ。

傍から見てもとてもじゃないがケンカという領域を外れてマジの殺し合いをする四人の恋姫達に、翔輝はもう頭を抱えるしかなかった。

その後、異変に気づいた瑠璃の執事である神鳴^{かみなり}が率いる霞家親衛隊の九七式中戦車部隊（陸軍から買収）が長谷川家を包囲するまで、その壮絶な死闘は続いたのであった。

こんなちよつと危ないけど、それでも幸せな日々がずっと続けばいいと翔輝は心から思っていた。

この何にも代えがたい幸せを守る為に彼は軍人になった。大切なものを守る為に人は戦う。それが巨大化したのが国同士の戦争だ。その中には人の数ほどの物語があり、守るものがある。翔輝の守るものも、そんな一つの物語であった。

このまま、五人ですつと笑い合える為だったら、どんな事でもする覚悟であった。

何かを守る為に人は強くなる。翔輝もまた、この幸せを守る為に強くなろうと決意していた。

だが、運命というものはそんな決意を胸に秘めた彼らに残酷な現実を与えるのであった。

普通に幸せに生きる。それさえも許されない、そんな非情な運命。数ヵ月後、翔輝は自分の運命を呪う事になる。それは

翔輝は走っていた。

海軍兵学校を飛び出して市街を全速力で走っていた。

頭の中はグチャグチャだった。涙が止まらず、後から後からと溢れてくる。先程入った事を信じたくない。でも足は止まらずに進み続ける。

視界が涙でゆがみ見えなくても、それでも必死に走った。

十数分前、学校の休み時間に同期の者と話していた時に教官から知ったその知らせ。

翔香が・・・倒れたと・・・

翔輝は転びそうになった足を引きずって持ち直して走り続けた。もう何も考えられない。今は全力で走るだけだった。

頭の中にあるのは翔香の優しい笑顔だった。他にも怒った顔、泣いた顔、恥ずかしそうな顔、たくさんの彼女の表情が流れていた。

大事な、大切なたった一人の妹。その彼女がどうして倒れなければいけないのか。信じられないし信じたくない。だが、それは全て現実だ。だけど、自分の目で見なければ真実はわからない。

いや、そんなのは関係ない。ただ純粹に、大事な妹の傍にいたい。兄として、翔輝はそう思いながら走った。

「翔香・・・ッ！ 翔香ッ！ って うわッ!？」

翔輝はつまずいて顔面から転んだ。全速力で走っていたのでかなり豪快な転倒となってしまった。まわりの人が変な物を見ているような目で見詰めるが、翔輝は気にせずに腕を着いて立ち上がると悲鳴を上げる足を無理やり動かして再び走り出した。

何度も壁や地面に激突するが、そんなのどうでも良かった。ともかく走る。彼はそれだけを実行した。

「翔香！ 翔香ああああああッ！」

翔輝は泣き叫びながら走り続けた。

目的地の、霞家本家に・・・

「翔香ッ！」

翔輝が翔香が運び込まれたという部屋の中に駆け込むと、そこには瑠璃と彼女の両親である叔父と叔母、珊瑚、瑪瑙、神鳴、霞家専属の医師員達、そして ベッドで横たわっている翔香がいた。

「翔香・・・」

翔輝が急いで彼女に駆け寄ると、翔香は苦しそうに顔をゆがめ、大量の脂汗を流していた。翔輝は必死になって彼女の手を掴む。なぜだか、その白い手がいつもよりも細く弱々しかった。こんなに細い腕をしていたのかと、改めて彼女の小ささを感じた。

「翔香！ 僕だよ！」

必死に声を掛けると、翔香は苦しそうに目を開ける。その瞳はあまりにも弱々しく、しばらく生気のない瞳で虚ろとしていたが、大好きな兄の姿を見つけると、精一杯笑った。

「お、おにい・・・ちゃん・・・」

「翔香。しっかりしろ！」

翔輝は泣きながら叫ぶ。声が震え、涙が止まらない。そんな兄の姿を見て、翔香は胸が苦しくなった。自分のせいで大好きな兄が泣いている。嫌であった。

「お兄ちゃん・・・泣かないでよお・・・私は大丈夫だから・・・」

翔香は必死になって翔輝を安心させようと微笑む。だが、その辛そうな笑顔は余計翔輝の心を傷つかせるだけだった。

何もできない自分の為に、必死になって笑顔になる。それは見ている者にとってとても辛いものでしかない。

「翔香・・・無理しなくていいから・・・ッ！」

「・・・無理なんか・・・してないよお・・・私は・・・お兄ちゃんの笑顔が見たいの・・・だから・・・だか・・・ら・・・」

その弱々しい言葉の後、翔香の瞳はゆっくりと閉じられた。瑠璃や珊瑚の悲鳴が飛び交い、翔輝の泣き声が響く。

「翔香ッ！ 翔香ッ！」

「大丈夫です。眠っただけですから」

白衣を着た医者が言った。それを聞くやいなやほとんど反射的に彼の胸倉を掴んだ。常日頃の彼を知っている者から見ればその行為は信じられないものだったが、それだけ彼が切羽詰っているという事は誰から見てもわかる。

「先生ッ！ 翔香はどうしたんですかッ！？」

「わ、わかりません」

医者から帰って来た言葉に、翔輝は愕然とした。

「わ、わからないって・・・あなたそれでも医者なんですかッ！？」

「わからないものはわからないのです。原因不明なんですよ。原因がわからない以上、こちらは何もできないんです」

その苦しそうな表情は、見ているこっちも辛くなるほど苦しそうだった。霞家専属の医師団。それはつまり世界最高峰の医療技術を持った医療スタッフである。その彼らが、主の思いを裏切る事となる。それは耐え難い辛さなのだ。

そして何より、誰かを助けたいという思いは誰よりも強い。それは医者として、人間として当然の事であった。翔香を助けたい。そう思っても、原因不明。どうすればいいのかわからないという苦痛は、どんな苦しみよりも辛い。

「そ、そんな・・・ッ！」

医師の言葉とその辛そうな顔に、翔輝は愕然としてその場に崩れ落ちた。虚しく床を見詰め、脱力し切った体は微動だしない。そんな彼の肩を瑠璃がそっと抱き締める。そんな彼女の肩も小刻みに震えていた。彼女だつて辛い。彼女の口から漏れる辛そうな嗚咽が、翔輝に厳しすぎる現実を嫌でも理解させる。

うそであつてほしい。そう願つても、これは現実。今日の前で、翔香が生死の境をさまよっている。

翔香を失うかもしれない。そんな事考えたくもないしそんな可能性はゼロであってほしいと根拠。でも、辛そうな翔香の顔や荒い息、そてい悲しむ瑪瑙や瑠璃、珊瑚の泣き声がそれを現実だと示している。

逃げる事など、できなかった。

力なくうな垂れて愕然とする翔輝に、医者はそつと問う。

「前兆のようなものはなかったんですか？」

「わ、わかりません・・・僕は海軍学校の訓練生ですから、家を空ける事も多くて・・・」

「・・・そうですか」

翔輝の言葉に、医者はうなずくとベッドで横たわる翔香を見る。

彼の目の前で、翔香は苦しげに域をしている。その衰弱ぶりは、もう彼女の命が短い事を嫌というくらいに示していた。

だからこそ、辛い現実を、伝えなければならぬ。

医者は苦しげに唇をキュツと噛んだ後、泣き崩れる患者の兄にそつと静かに言った。

「この衰弱ぶりから見て、おそらく　今夜が峠とっげでしょう・・・」

「そ、そんなッ！」

翔輝は泣きながら医師に掴み掛かった。それは翔輝だけではない。瑠璃や珊瑚、瑪瑙までもが泣きながら医者に翔香を助けてくれと願う。

「先生ッ！　何とかならないんですかッ！？　翔香の命を救ってくださいッ！　お願いしますッ！　翔香は僕にとつてたった一人の大切な妹なんですッ！」

「お願いですわッ！　翔香を助けてッ！　お金ならいくらでも支払いますわッ！」

「頼むッ！　どうにかして翔香を救ってくれッ！　この通りだッ！」

「ちよつと、あんた霞家専属の医者なんでしょッ！？　何とかしなさいよッ！」

翔輝達の必死の懇願こんがんだったが、彼だつて助けられるのなら助けた

いと願っている。だが、できないのだ。自分達の力では、彼女を救う事はできないとわかっている。だからこそ、辛い。

「原因がわからない以上、私達にも何もできないんですよ・・・ッ！」

医師の言葉に、翔輝は崩れ落ちた。震える瞳で隣にいた看護婦を見るが、彼女も力なく首を振るだけだった。

翔輝は・・・世界が終わったように感じた。

父や母が死んだ時も、こんなにはならなかった。それはそうだ。

父は幼い頃に死に、母が死んだ後には翔香がいた。でも 今度は、何も残らない。

翔輝は泣き叫ぶしかなかった。全員が全員翔輝を見ていたから、気が付かなかった。

一筋の雫が、翔香の瞳から悲しげに流れていた事を・・・

その夜、おそらくは翔香との最後の夜の部屋には翔輝、瑠璃、珊瑚、瑪瑙、そして翔香の四人がいた。その誰もが悲しげに涙を流している。

悲しみが、部屋を満たしていた。

「お兄ちゃん・・・何で・・・泣いてるの・・・？」

自分の手を握って泣き崩れている兄を見て、翔香は悲しくなった。兄にはいつも笑っていてほしいのに、こんな辛そうな兄の顔など、見たくなかった。

翔輝だけではない。瑠璃にも、珊瑚にも、瑪瑙にも。みんなには笑っててほしかった。

笑顔が絶えない関係。それが自分達の絆だったのに、今ではそれはなくなってしまうっている。悲しさだけが、世界を支配していた。

翔香はそつと自分の手を優しく包み込む兄の手をギュツと握った。その力は弱々しいが、兄妹の絆はしっかりと結ばれていた。

ふと視線を変えると、瑠璃や珊瑚、瑪瑙も泣いていた。みんな、泣いていた。その多くの涙に翔香は胸が痛くなっただが、自分にはど

うする事もできなかった。

悲しみの中、意外にも自分が冷静だという事に驚いた。冷静な部分が、自分に迫る運命を理解していた。それは黒い闇。怖くない訳がないし、いやだ。でも、避けられない運命。

「私・・・死んじゃうんだ・・・」

「そ、そんな事・・・ッ！」

「うつん・・・私にはわかる。自分の体は、自分が一番わかるから・・・」

翔香の言葉に、翔輝達は何も言い返せなかった。それが、肯定の意味だった。

翔香はもう助からない。嫌なのに、その現実には確実に迫ってきている。その恐怖はどんな闇よりもずっと黒く暗くて、怖い。

避けられないからこそ、その恐怖は何倍も怖い。

泣き崩れる兄を、翔香はそつとその手を握った。震える兄の手は、とても温かかった。その温もりに、自分の中にある何かが壊れたような気がした。

今まで自分が必死に耐えていた恐怖が、津波のように溢れ出す。

死にたくない。

もつと生きたい。

大好きな兄と、大切な友達とずっと一緒に生きていたい。

そう願うのに、現実はまだにも厳しく、辛い。

死にたくないのに、自分に待ち受ける運命は死のみ。こんなにも辛くて残酷な事はない。

ほろりと、涙が流れる。

生きたいのに、死ぬしかない。

こんな辛い現実、嫌だった。嫌なのに、本当に嫌なのに・・・ッ！助けてほしい。

助けて・・・お兄ちゃん・・・ッ！

震える兄の手を、翔香はギュツと握る。

「・・・お兄ちゃん・・・ッ！ 私、死にたくない・・・死にたく

ないよお・・・ッ！」

その悲痛過ぎる悲しい言葉に、翔輝は泣き崩れる。それは瑠璃、珊瑚、瑪瑙も同じだ。

助けてあげたいのに、助けられない。

こんなに苦しくて辛い事などない。

目の前で苦しむ親友を、妹を、救う術がない。自分の無力さが、嫌で仕方がなかった。

「ごめん・・・ッ！ 本当に、ごめんな・・・ッ！」

「・・・何でお兄ちゃんが謝るの・・・？ お兄ちゃんは・・・何も悪くない・・・謝らないでよお・・・」

「違う・・・ッ！ 全部、僕のせいなんだよおッ！ ぼ、僕が・・・ッ！ 僕がちゃんとしていなかったから・・・ッ！」

翔輝は泣き崩れながら叫ぶ。その悲痛な声に、翔香も泣きそうになる。そんな顔してほしくないのに、大好きな兄は泣き崩れている。それが悲しくて仕方ない。

「翔香・・・ッ！ 翔香あ・・・ッ！」泣き崩れる珊瑚。

「翔香あッ！ 生きてッ！ 死んではダメですわッ！」泣き叫ぶ瑠璃。

「・・・ッ！ ひぐう・・・ッ！」声を押し殺して泣く瑠璃。そして、見た事もないくらい辛そうな顔で泣き崩れる翔輝。

悲しい顔をしてほしくない大切な人達の悲痛な表情に、翔香は苦しくなる。

これで最後になるかもしれない。

なのに、みんな泣いている。

最後はみんなの笑顔が見たい。そう願っているのに、誰も笑ってくれない。

せめて死ぬ前に、みんなの笑顔が見たかった・・・

「・・・お兄ちゃん・・・ありがとう」

「え？」

どの優しい言葉に驚いて顔を上げると、そこには翔香の優しい

な笑顔があつた。痛みや苦しさを感じさせないその笑顔は、翔香が出せる最後の力を振り絞つた笑顔であつた・・・

翔香はそつと兄の涙に濡れた頬を撫でた。

「・・・私のお兄ちゃんできてくれて・・・いつもそばにいてくれて・・・いつも励ましてくれて・・・たくさんの思い出をくれて

本当にありがとう・・・」

その感謝の言葉に、翔輝は涙を拭い取ると、力を振り絞つて笑みを作つた。

「礼なんていらないよ。だって、僕と翔香は兄妹だろ？ 当然の事さ」

「・・・えへへ・・・そうだね・・・私達・・・たった二人の兄妹だもんね・・・」

「そうだよ。ずっと、変わらない。大切な妹さ」

「・・・じゃあ私も・・・大切なお兄ちゃんだね・・・」

「ああ、ずっと、いつまでも・・・」

「・・・嬉しいなあ」

翔香はそつと兄の体を引き寄せる。だがその力はすでに弱々しく、翔輝から近づく事になった。抱き締めるようにして兄を引き寄せると、翔香は大好きな兄に満面の笑みを向ける。

「お兄ちゃん・・・」

「翔香・・・」

チュツ・・・

涙で濡れた翔輝の頬を、翔香はそつとキスした。驚く翔輝に、翔香は笑みを浮かべたままそつとその気持ちを言つた。

「 大好きだよ」

翔香のその言葉に、翔輝は小さくうなずくと再び泣き出してしまふ。当然だ。いつまでも笑ってられない。

でも、翔香はもう十分だった。

大好きな兄の笑顔が見れた。それで、もう十分だった。

翔香はそつと、ちよつと問題のある親友の瑠璃、頼れる姉の珊瑚

と瑪瑙を見る。いつの間にか、三人とも涙を拭い取っていた。笑顔まではまだ遠いが、あと少しだ。

翔香はそつと親友である瑠璃を見る。瑠璃もちゃんと、翔香の瞳を見詰めていた。

「瑠璃ちゃん・・・今まで私の友達でいてくれて、ありがとう」

「何言ってるんですの？　これからだつてずっとそうですわ！」

「・・・そうだね。ずっと、友達だよ・・・」

「もちろんですわ・・・ッ！」

瑠璃の言葉に、翔香は嬉しそうに笑った。ずっと親友。こんなに嬉しい言葉はないだろう。翔香にとつて、嬉しい言葉であつた。

「珊瑚さん・・・あんまり・・・お兄ちゃんを・・・いじめないでね・・・」

「そんなの、あのバカ次第よ」

「お兄ちゃんは・・・バカじゃないよお・・・」

「バカよ大バカ。妹のあんたの事しか考えてない、最高の妹バカよ」
「・・・えへへ・・・そつかあ・・・」

「そこ、笑うところじゃないわよ？」

そう言う珊瑚にも、小さないながら笑顔があつた。その笑顔に満足したのか、翔香はずつと黙っている瑪瑙を見る。

「瑪瑙姉さん・・・お兄ちゃんの事・・・任したからね・・・」

「ああ、安心しろ。ちゃんと翔輝は私が婿にもらつてやる」

「・・・そ、それはダメだよお・・・」

翔香は本当に嫌そうな顔をして、今にも泣きそうになる。そんな翔香に瑪瑙は、

「泣き落としはナシだ。翔輝は誰にも渡さない」

「そつか・・・」

翔香は何か納得したようにうなづく。そんな彼女のいつにない反応に瑪瑙が不自然さを感じた刹那、翔香がそつと口を開いた。

「じゃあ、瑠璃ちゃん、珊瑚さん、瑪瑙姉さんをお願い・・・」

「何ですの？」

「何よ？」

「何だ？」

不思議そうに見詰める三人に、翔香はちょっと悔しそうに笑いながら言った。

「お兄ちゃん、瑠璃ちゃん達にあげる」

「翔香！？何を・・・ッ！」

「そ、そうッ！翔輝は元々私のものだが、翔香はそれでいいのかッ！？」

「そうッ！あんたはそれでいいのッ！？」

驚く三人に、翔香は悲しげな笑みを向ける。その瞳の奥にある涙を堪えた辛い決意に、瑠璃達は言葉を失った。

「・・・いいの・・・私は・・・これからもお兄ちゃんを見守るから・・・だから・・・瑠璃ちゃん達は・・・お兄ちゃんを・・・支えてね・・・必ず・・・幸せにしてあげて・・・」

翔香の悲しい決意の言葉に、三人我慢できずに涙を流した。悔しそうに顔をゆがめ、瑠璃は言い返す。

「おかしいですわ。そのセリフは・・・普通男性に言うんですのよ」

「・・・あれ？そうだっけ・・・」

「そうですわ。本当に・・・ッ！」

瑠璃の瞳から絶え間なく涙が流れ続ける。そんな瑠璃の手を握り、翔香は翔輝を見詰める。翔輝は涙でグシャグシャになった顔で見詰め返す。

「お兄ちゃん・・・お願いがあるの」

翔香は恥ずかしそうに　お願いした。

「抱き締めて・・・」

「ああ・・・」

翔輝は翔香の体を起こして、しっかりと抱き締めた。その体は折れそうなほど細かった。どうしてこんなになるまで気づかなかったんだろうと、翔輝は再び自分を責めた。そんな翔輝の頬に、翔香はそっと口づけをする。力ない体でも、その唇はとても温かかった。

「・・・お兄ちゃん・・・私は星になって・・・いつでも・・・お兄ちゃんを見守ってるからね・・・お兄ちゃんは・・・一人じゃないんだよ・・・」

「うん・・・ッ！　ありがとう・・・ッ！」

翔香は、天使のようなかわいく優しげな笑みを浮かべ　　ゆつくりと、静かに、そつと、目を閉じた。

そのまぶたは、二度と開かれる事はなかった・・・

「う、うわああああああああッ！」

「いやああああああああッ！」

「翔香ああああああああッ！」

「い、医者だあッ！　医者を呼んで来いッ！」

少年と少女達の絶望的な悲鳴に医師達が駆け込んだ時には　　全
てが終わっていた。

一九四一年四月一日の夜の事だった・・・

その三日後、翔香の葬式が挙げられた。その間、翔輝はずっと泣き続けていた。翔香の遺影を抱き締めながら・・・

たった一人の大切な妹である翔香を失った翔輝は自殺未遂を起こすまで精神が不安定な状態だった。だが、瑠璃や珊瑚、瑪瑙がずっと彼を励まし続けてくれたおかげで、翔輝は少しずつだったが元氣を取り戻していった。

そして・・・

一九四一年十二月八日、日本機動部隊が米太平洋艦隊の根拠地であるハワイ真珠湾に奇襲攻撃を敢行した。

これが、長く辛い太平洋戦争の始まりだった・・・

開戦後しばらくして、翔輝は立派な海軍士官になっていた。

翔香のいなくなった傷はまだ治りきっていないが、それでも笑顔

を取り戻すくらいまでは回復していた。

そんな翔輝は完成したばかりの最新鋭世界最大最強超弩級不沈戦艦『大和』に乗り込んでいた。

その巨体を黒く輝いた瞳で見詰めていたが、方向音痴の彼はものの見事に艦内で迷ってしまった。

ともかく上に出ようと艦内を走り回り、ようやく甲板に出た。そこは一面雪景色で、空からは白い粉が舞い降りてきていた。そんな雪景色の中、翔輝は彼女と出会った。

これから先ずっと彼を支え、彼も彼女の支えになるという、偶然ではなく必然で結び付けられた二人。それが・・・

「・・・大和、と呼んで下さい。それが、私の名です」

風が吹き、翔輝は軍帽を押さえる。そして、軍帽を押さえた格好で翔輝は微笑んだ。

「大和、か・・・。さすが、『大和』の艦魂だね。同じ名だ」

翔輝は少女　大和に近づき、軍帽を取り上げる。軍帽の中からキラキラと輝く長い黒髪が靡く。翔輝はそんな大和の髪を、わしゃわしゃと掻き乱す。

「な、何をするんですか!？」

大和は顔を真っ赤にして怒る。翔輝は微笑んだ。

「よろしくな。大和」

翔輝が言くと、大和は顔が真っ赤なのは変わらないが、それは別の意味で赤くなった。

大和は軍帽を被り直し、顔を真っ赤にしたまま微笑んだ。

「はい、長谷川少尉」

『大和』の甲板が純白の雪で染め上げられ、雪は降り続ける。まだまだ冷たい風が『大和』を流れ、軍艦旗が静かに靡く。

これが、運命的な二人の、最初の出会いであり、翔輝の新たな物語の始まりであった・・・

（後書き）

はせがわ しょうか
《長谷川翔香》

出身 広島県呉市

身長 152cm

髪型 長髪（額と両耳の少し上に白い紐がりボン結びにされている）

年齢（1940年12月現在） 12歳

享年 13歳 1941年4月1日没

誕生日 3月3日

家族構成 父（戦死） 母（病死） 兄・翔輝

好きなもの 翔輝・瑠璃・珊瑚・瑪瑙・翔輝と一緒にいる事・みんなの笑顔・幸せな日々・料理作り

嫌いなもの 争い事・戦争・軍隊・翔輝に嫌われる事・翔輝に近づく女・偏った食生活

事実上今作のヒロインにして本編には名前だけ登場していた翔輝の妹。本編での翔輝の心の闇は彼女の死が原因。とても明るい子で家事全般が得意で大好き。翔輝の為においしい料理を作ろうと努力していたらいつの間にかやらプロレベルにまで達してしまった。創作料理も得意。掃除好きでもあり翔輝曰くいいお嫁さんになる女の子。いつもいつも自分を守ってくれる兄の翔輝が大好きで、極度のブラコン。しかも兄妹の関係を越えた感情を持っていて、もしも血の繋がりがなかったら翔輝と結婚したいと願うほど。ちなみに小さい頃の将来の夢は《お兄ちゃんのお嫁さんになる事》だった。誰からも慕われていて翔輝からも溺愛されていたのだが、原因不明の病気に倒れて帰らぬ人となった。そのあまりにも早過ぎる死が、翔輝のその後の人生が大きく変える事になる。享年十三歳

翔輝「どうも皆さんお久しぶりです。《艦魂年代史》ドキッ 恋する乙女は大艦巨砲主義》主人公の長谷川翔輝です」

翔香「いつもお兄ちゃんがお世話になってます。妹の翔香です」

瑠璃「霞瑠璃ですわ。お会いできて光栄ですわね」

珊瑚「珊瑚よ」

瑪瑙「霞瑪瑙だ。いつも私の大好きな翔輝が世話になってるな」

作者「さあて皆さんお久しぶりです。本編が終了して一週間以上が過ぎました。これ以上休業しているとなんか皆さんに忘れられそうなので、外伝第一作《艦魂年代史外伝》星になってあなたを見守って《》を投稿させていただきました。今作は翔輝達の戦前のお話で、ここから彼らの物語が始まりました」

翔輝「それにしても、僕ってこういうあとかきコーナーって初めてだよ」

作者「そういえばそうだね。感想コーナーとかあとかき外伝には出てるけど、こういう普通のあとかきコーナーは初めてだね」

瑠璃「私達も初めてですわ」

翔香「わ、私なんか初登場だよ」

作者「確かに。本編では翔香といえば翔輝の心の闇の部分としてずいぶん名前だけ書いてきたからね。実際どんなキャラなのかという
と　こんなキャラです」

瑠璃「何ですのその穴のないドーナツのようにやる気のない説明は」
作者「いやあ、実は翔香って最初の頃は死なずに翔輝を支える役だったんだけど、それは瑠璃とかに任せて翔輝の心の闇の部分として使う事にしたんだ。だから翔香のキャラ設定もある訳で、今回はそれを使って書いたんだけど」

翔香「なんか、大和さんや陸奥さんに似てますね」

作者「元々似てるキャラ設定だったし」

珊瑚「他に何かいい設定はなかったの？」

作者「うーん、一応弓道で段位を取ってる設定だったけど」

瑪瑙「確かに。いい腕をしているな」

翔輝「それにしても、いつもこういう所って大和達艦魂ばかりだから、人間だけってのは新鮮ですね」

作者「そうだね。これで僕も四六センチ砲で吹っ飛ばされる事はないしね」

翔輝「大変ですね・・・」

作者「そうだね。でも、こうしてまた黒鉄軍復活ができて嬉しいよ。これからどんどん外伝を修正して、新しい外伝も書いてみたいしね」

翔輝「その意気です作者さん。がんばってください」

作者「おうよッ！」

珊瑚「でもあんた、この前なんか艦魂の将来についてグチってた？」

作者「え？ 何の事？」

珊瑚「ほら、最近の艦魂は基本設定すら忘れているって」

作者「ああ、あれね。気にしないで」

瑪瑙「確かにな。草薙先生発の真名制度とか」

作者「あれはいいよね。僕も大鳳のかのんって名前はあの真名制度を見て考えたんだし」

瑠璃「でも同先生発の艦魂陸地上陸可能制はどうかと思いますわよ。あなたのグチもそれでしょう？」

作者「いやあ、確かに初めて見た時はうーんと思ったけど、今じゃもう定番になったしね。気にしない」

翔香「でも確かに改めて考えると変だよな。人間に例えるなら魂だけが抜け出す幽体離脱みたいなものだし」

作者「そうだよな。今じゃ艦魂というと大きく分けて黒鉄流と草薙流の二種類に分類されるんだ。伊東先生は僕側だと思うけど」

翔輝「でも、伊東先生の艦魂達が物を取り出す時はどの艦にいてもできますよね。僕らの艦魂は自艦でしかできませんし」

作者「でも陸地に上陸しないし」

珊瑚「確かにそうね」

作者「火星先生もついに陸地上陸しちゃったし、他の作者も真名制度が多いしね。すっかり艦魂世界の野党になったよ」

瑪瑙「まあ、紀伊の方が人気があるのは確かだからね」

作者「いつその事外伝出しまくって過半数取って与党に戻ろうかな」
珊瑚「でもそれって一人相撲じゃない？」

作者「大丈夫！ 伊東先生が味方についている！」

瑪瑙「裏切られないようにしっかりと同盟を結んでおくんだな」

翔香「黒伊同盟とか？」

瑠璃「なんか《伊》って略すとイタリアみたいですね。あの史上際弱優柔不断国に」

作者「まあ、二度の大戦どっちも裏切って連合国側についた国だしね。仕方ないよ」

瑪瑙「今一度艦魂という設定を見直すべきだろうな。これではツンデレと同じになってしまふ」

翔香「え？ ツンデレって何かあるの？」

翔輝「いや、翔香は知らないくていい話だから。耳を塞いでなさい」

翔香「え？ ちょっとお兄ちゃんッ！ 耳塞がないでよおッ！」

作者「えつとだな、ツンデレは元々は時間経過の感情移動らしいんだ。最初ツンツンやがてデレデレみたいな。最初の頃は今みたいな二面性じゃないんだね。広がるにつれて間違った使い方になって定着する。まさに今の艦魂みたいじゃないか」

翔香「えーんッ！ 聞こえなかったよッ！ お兄ちゃんのバカアッ！」

翔輝「いいんだよ。お前は知らなくて」

珊瑚「今更遅いんじゃないの？ 草薙先生が与党にいる限り、私達野党がどんなに提唱しても遅いし」

作者「うん。だから諦めてる」

瑪瑙「元々私達の艦魂も原作設定とは違うしな。一人の人間に見える艦魂は一人っていう定義もなくなったし」

瑠璃「この設定自体も間違いな訳ですし」

作者「そういう事。もし僕が原案者なら安保闘争並みの暴動を起こしていたらうけど、僕も流用者だからね。傍観体勢に入る事にする」

翔輝「とりあえず伊東先生はこっち側ですから、二人で協力して外伝を出しまくれば、いつの日か与党に返り咲きますよ」

作者「そうだね」

瑪瑙「しかし、いつの間にか艦魂の話になっていたが、私達は人間よ？」

作者「そういえばそうだね。ごめんごめん」

翔香「私、初めてこうして表舞台に立ててすごく嬉しかったです。

作者さん、ありがとうございました」

作者「いやいや、お礼なんていらないよ」

珊瑚「そうよ翔香。こんなアホに礼をするだけ呼吸の無駄よ」

作者「お前は相変わらず最低だな暴力女」

珊瑚「何ですってッ！やるっていつのッ!？」

翔香「だ、ダメだよおッ！ケンカはダメッ!」

作者「やっぱり翔香はいい子だね。弓を構えているのはどうかと思うけど。うん、いい子だ。翔輝がシスコンになるのも納得だね」

翔輝「ぼ、僕は別にシスコンという訳では・・・ッ!」

作者「じゃあ翔香が彼氏を連れてきたら？」

翔輝「ぶっ飛ばします。もちろん彼氏の方を」

作者「やっぱりシスコンじゃん」

翔輝「ち、違います！これは父親役という設定で」

翔香「大丈夫だよお兄ちゃん。私はお兄ちゃんと一緒にいらればいいんだから」

翔輝「翔香ぁ・・・」

作者「じゃあブラコンの翔香に質問」

翔香「ぶ、ブラコンって・・・」

作者「翔輝は大和といい感じだけど、大和があなたのお姉さんになる可能性は」

翔香「ありません。お兄ちゃんが他の女の人を連れて来たらこの矢で射抜きます」

翔輝「ちよつと待てッ！ 大和に暴力は許さないぞッ！」

翔香「な、何でよッ！ お兄ちゃんは私よりそんな女の方がいいって言っのッ！？」

翔輝「あ、いや、そういう訳じゃ・・・」

翔香「お兄ちゃんのバカああああッ！」

翔輝「あ、ちよつと待って翔香ッ！ 話を聞いてよおッ！」

瑠璃「翔輝様ッ！ 待ってくださいですわぁッ！」

珊瑚「ちよつと、待ちなさいよバカ翔輝ッ！」

瑪瑙「安心しろ翔香！ あなたのお姉ちゃんはこの私だ！ 私が翔輝と契りを結べば問題なし！」

翔香「バカああああああッ！」

作者「ああ、行っちゃったと年がら年中小春日和達が。さて、こんな訳で次回は金剛と滝川の初めての出会いの外伝を修正したいと思います。いつになるか不定期更新ですが、これからも黒鉄大和の艦魂年代史シリーズをよろしく願います。ではまた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4946f/>

艦魂年代史外伝 ～星になってあなたを見守って～

2010年10月8日15時04分発行